

グランドゼロ

GROUND
ZERO JCF

95 春

2013年4月26日 発行

●子どもたちを守る様々なアプローチ

福島支援

小児検診

ベラルーシ訪問

食品放射能測定



私の人生を飾るもの

ブライト・オクジャワ（1924～1979）

訳・神谷さだ子

私の人生を飾るもの

眠りに落ちていく鳥たちのかしませい鳴き声

バラ、たそがれ、小枝がサラサラと鳴る音

そしてサクソンスキー公園の並木道

過ぎ去った日々には辛かったことはない

愛ややさしさが足りなかったことに

すべてが去っていく 悩みも熱情も

そして長くはなかったワルシャワでの私の青春

グランドゼロ 95 春

GROUND ZERO JCF

目次

子どもたちを守る 様々なアプローチ

高橋亨平医師を偲ぶ 子どもと妊婦を守らない国に未来はない	<鎌田 實>	6
までいな歩み	<神谷さだ子>	10
南相馬のお母さんからの手紙	<尾賀江美>	12
事故から2年 ー福島報告ー	<横内香苗>	13
守りたい子どもたちの心と体	<中山佳子>	16

97 次訪問団報告

ベラルーシにおける新生児の先天性疾患	<鈴木真波>	20
ベラルーシ訪問を通じて	<坪倉正治>	23
今後の福島での検査体制を模索	<二瓶正彦>	26
ドイツマインツの脱原発便り	<柳田逸枝>	27
人類と天地を守る世界の摂理 議員と市民の院内集会	<横内香苗>	30
Team めとば測定室 今後の課題	<中澤啓子>	32
食品等放射能測定結果 (2012年12月～2013年3月)		36

連載 & お知らせ

チェルノブイリメモリアルデー 2013		40
連載随筆「ことばのいのち」	<宮尾 彰>	42
松本の食卓		44
モスクワ便り		45
振替用紙のメッセージから		46
ありがとうございました！		48
イラクに帰国されたリカ医師からのメッセージ		51
Здравствуйте！ (事務局広場)		52
カルチャーレビュー		54

子どもたちを守る様々な アプローチ



ベトカ地区病院の過去のデータを検証する（右から）坪倉医師、ベトカ地区病院副院長、通訳のイリーナさん

原発事故がもたらした多くの災禍。
その一つ一つを科学的に検証していく息の長い取り組みが必要だ。それは私達が普通におだやかに暮らしていくための基盤作りになる。そしてまた相互の関係の中で新たな社会の仕組みを作ることにつながる。
JCFのいくつかの取り組みを報告します。

高橋亨平医師を偲ぶ

—子どもと妊婦を守らない国に未来はない—



亨平先生との出会い

高橋亨平医師（南相馬原町中央産婦人科医院・産婦人科医）が亡くなられた。74歳。

亨平先生はJCFの良き理解者でした。

2011年3月21日、諏訪中央病院とJCFはタッグを組んで、震災後30キロゾーンに初めて入る救援医療班として南相馬入りました。

JCFはその後南相馬市立総合病院を基点に支援をしていたのですが、その時に南相馬の元医師会長である高橋亨平先生にお会いしました。

僕はこれまでたくさん医師会長を見てきました。中には医師会の権利を主張するばかりで好きになれない人もいました。欲張り村の村長さんと言った評論家がいきましたが、確かにそういう医師会長もいました。でも時々めちゃくちゃ面白くて大物で人間味あふれる医師会長とお会いしました。高橋亨平先生はまさに魅力あふれる医師でした。僕は会ってすぐ亨平ファンになりました。

JCFは「放射能の見える化」を叫んで、放射能対策に動かない県に先立って、外部被曝の測定のためにガラスバッジ（積算線量計）の配布を始めました。高橋医師はガラスバッジ配布に理解を示してくれ、生まれたての赤ちゃん

や、お母さんたちにガラスバッジを装着して外部被曝量を測定するように、自分の患者さんたちを説得してくれたのです。先生の信頼はあつく、地域のお母さんたちが全面的に協力してくれました。JCFのスタッフがガラスバッジの交換に毎月泊まりがけで福島に行くと、JCFの事務所として先生の病院の一室を貸して下さいました。

南相馬市立総合病院へのホールボディカウンター導入

「JCFが福島の子どものために外部被曝を測ってくれるなら、次は内部被曝が問題だ」と言って、「今度は私がホールボディカウンターを買って内部被曝を測る」と言いだしました。ホールボディカウンターは約5千万円します。それを個人で購入すると聞いてびっくりしました。そのくらい亨平先生は市民を何とか守りたいと思っていたのです。

勿論実現はしませんでした。けれども南相馬市がいちちやくホールボディカウンターを借りる手はずをしたり、購入のための予約をしてくれたのです。これも亨平先生の存在が大きかったと思います。そして先生は南相馬市立総合病院で2台のホールボディカウンターをいち早く動かして、体内被曝を測定するシステムを作り上げました。

先生はぼくによく言いました。「子どもと妊婦を守らない国に未来はない」。先生の口癖でした。

除染に取り組む

ガラスバッジを付けた妊婦さんの外部被曝量が高いとわかると、先生は若者を集めて妊婦さんの家の除染作業を始めました。しかもこの時すでに亨平先生は大腸がんで肝臓に転移があることを知っていました。手術をすることに希望をかけ、福島大学医学部に入院したのです。しかし肝臓への転移が大きく、手術は無理ということで、抗がん剤治療に切り換えられました。除染作業はこのような状況で始まったのです。亨平先生はご自分の病気をよこにおいて、妊婦さんを守ろうとしました。

先生の頭の中には次々に面白いアイデアが浮かびます。ガラスバッジの積算線量値が高い妊婦さんの中で、裏山が近いために家の除染作業しても線量が下がらない方がいると、鉛入りのカーテンを作り、妊婦さんに貸し出したいと言いだしました。「妊婦さんの部屋に鉛入りのカーテンを付ければ、被曝量がある程度下げられるのではないだろうか？ 鎌田先生どう思う？」

と目を輝かせて聞いてくるんです。ご自分のポケットマネーで鉛入りのカーテンを作ったりしました。いつも妊婦さんの身になっているのです。

病にも負けず

震災で先生が避難したのは一日だけ。「町に産婦人科医が居なくなったら大変」と言って、避難先からすぐに戻ってきました。地域を愛していたのです。

2011年3月15日、子宮頸がんの手術を受けたことのある若い妊婦さんから、破水したと連絡が入りました。3月12日に起こった福島第一原発一号機建屋の水素爆発のために、町はてんやわんやでした。道路は大渋滞で普段なら10分で到着するところが3時間以上もかかりました。亨平先生は帝王切開で出産をする準備をしていましたが、電気がない。輸血用の血液も緊急用の薬剤も手に入らない。酸素もない。先生は悔し涙で手術を諦め、救急車を呼び福島医大に搬送しました。出産は無事済んでお母さんからお礼状が届きました。「あの困難のなか、尽力をして下さって、ありがとうございます」。

その手紙を読んで先生は僕にこんなことを言います。「ぼくは涙が出ないシェーグレン症候群という病気なんだ」。

シェーグレン症候群という病気は唾液や涙が乾いてしまつて全く出ないという病気で、膠原病の一種と言われています。

「この10年間涙を流したことは無かったのです。しかしこの患者さんから手紙をもらった時は、ポロポロポロポロこんな

涙が出るものなんだと思う程涙ができました」

患者さんも命がけでしたが、亨平先生も命がけだったんです。しばらくして先生から「肺にも転移がある」と打ち明けられました。

でも先生の夢はどんどん膨らんでいきます。病気に負けていませんでした。社団法人南相馬除染研究所を作り、科学的に除染をすることに一生懸命でした。野菜の水耕栽培を普及させる活動も始めました。亡くなる数カ月前、先生の病院を訪ねた時、「この水耕栽培のレタスがうまいんだ」と先生は目を輝かせておっしゃいました。身体中が



南相馬除染研究所を立ち上げて、除染に取り組む
(中央・高橋医師)

んが広がり辛い状況のはずなのに、いつも前を向いて、今日よりは明日、この町を良くしたいと思いつけていました。

11月、先生をお訪ねしました。「肛門の所にがんが広がって座るのも大変」と僕に言いながら、それでも笑いながら外来の患者を見なくっちゃといいつけていました。

南相馬エコシティー構想

「除染をしながら、クリーンエネルギー作りをする。もう3・11の前と同じような哲学や発想ではダメだ。世界を変えなければいけない」と亨平先生は僕に力強く話してくれました。

「休耕田を利用してバイオマスとなる作物を栽培して、その作物からエネルギーを取り出し、蓄電池にして電気自動車にしてみたい。エネルギーの地産地消をやってみよう」と目を輝かせました。

僕が週一回出演している日本テレビの夕方のニュース番組『ニュースエブリ』で先生の夢を語ってもらいたいと思いい、取材をお願いしました。「今、語っておくことが大事だな」とにやっと笑って取材の日を決めてもらいました。

12月初め先生からお電話がありました。「大学病院に入院している。鎌田先生悪いなあ。今は取材を受けられな

い。少し良くなったところで夢を語らせてもらおうよ」。勿論それでいいです、とお返事をしました。

今年1月22日、南相馬の何人もの人から哀しい連絡が来ました。

みんな先生のことを誇りに思っています。先生の言葉で沢山の赤ちゃんが救われました。見えない放射能に負けそうになっている人々に、先生は科学的なデータをもとに勇気を与え、一歩もたじろぐことなく、できるだけ科学的に命を守ろうとし続けました。

次の世代を大事にしたい、先生が繰り返し述べたことは、常に市民の側にたつて命を守る活動を続けました。

長い間ご苦労様でした。

日本テエルノブイリ連帯基金はこれからも先生の御遺志を受け継いで、福島の子どもを守る活動を続けていこうと思っています。

安らかにお休み下さい。

鎌田 實（JCF理事長）

までいな歩み

神谷さだ子（事務局長）

遺影の笑顔がやさしく私達を迎えてくれた。2月10日、福島県南相馬市で高橋亨平先生の告別式が行われ、参列した。「みんな、俺の葬式をやっているの？」と壇上から揶揄っていらつしやるかのように思える。

亨平先生は、いつも、静かに語られた。3・11以後を私達はどう生きていったらいいのか。妊婦さんや子ども達を守るために何をしなければならぬか。それは、私達JCFが南相馬に通う原動力にもなった。亨平先生の語り口は、穏やかで軽妙。じっと耳を傾けながら、福島でできる事、やらなければならぬ事が明確になっていった。

このごろ、福島の人たちの話し方が耳になじんできた。飯館村の菅野村長が「までいにくてきた」と語る「ま

でい」は文字面や語義にはない、実生活に伴ったふくよかさ、しんの強さが感じられる。

「わたしらはあ なんども うつになつたように なんもさ できなし はあ」

極度の緊張のなかにずっといられるわけではない。ずっと抑えていた感情が行き場を求めて落ち込んだり、ハイテンションに盛りあがったりする。3・11直後からずっとつながっている鶴島さんが、頬杖をつきながら、言った。「私達はすごい大変な中をやってきたんだね。今までそんな事を思ってもみなかった。最近いろんな本を読むと、私達はこんなに困難な中にいるんだ、って今になって思うんだ。」

あの日から、自分の置かれている場を問い返すことさえできなかつた多くの方々がそれぞれに自分を振り返りだした。福島方言の土臭さ、おおらかさが、この未曾有の混乱と行き場のない

困難な状況を生き抜いてきた力ではないかとさえ思う。議論が苦手な日本人、日本語の持つあいまいさがその原因とも言われるが、あいまいだから抱えられる起伏の揺れの幅の大きさがある。

放射線災禍や内部被曝について見ていく時に、決して平均値、だけでみてはならないと思う。一人ひとりの生活の仕方、食生活は違い、数値を平均化して語っても、解決には至らない。

内部被曝線量を一人ひとりの事例別に捉えているのが、南相馬市立総合病院・相馬中央病院で内部被曝測定を行っている坪倉正治医師だ。これまで、福島県住民の体内被曝線量測定者は約5万人、坪倉医師が測定した8千人の内パーボディ千ベクレルを超えた人は10人いた。イノシシ肉を食べていた夫婦、やはり食品測定で高い放射性物質が検出され、出荷制限が出ていたイノシシ、きのこなどを食べていた方たち

だった。柿・かぼちゃ、みようがから高いセシウムが検出されるという。幸いなことに、子ども達の99・9%はND（検出限界以下）だった。

内部被曝は事故の初期被曝によるものではなく、食品に依る。測定していない、出荷制限のかかった物を継続的に食べていた場合に高くなることも解った。

2011年4月、南相馬市に入った坪倉先生はやはり亨平先生の元を訪れ、外部・内部被曝を防護していくことからスタートした。亨平先生の遺志を受け継いでいくことを決心されている坪倉先生もこの2年間の測定結果からも、今、内部被曝が測定されなかったからといっても、よしとせず、継続的な内部被曝測定と健康診断が必要と言われる。JCFの姿勢と一致している。うれしいことに、この4月から、南相馬市では年に2回、学校の健診項目として、内部被曝測定が行われるこ

とが決定とのニュース。これがモデルとなつて、福島県内、更に関東圏でも実施されることを期待する。

子どもサポートセンター「かのん」では、ガイガーカウンタとガラスバツジを使っていただいている。震災後、市の職員を辞し、個人で発達障がい児のサポート施設を開所した新妻さんご夫妻。「この大変な時によく」と問えば、「こういう時だからこそ、できたんですよ」と言われる。

緊急時、広い体育館の避難所で、それまで気づかれなかった子ども達の問題がわかった。単に突然の災害時だから、または、プライバシーのない集団生活だからという理由だけでは、解決できなかった不安定な子ども達がい

た。「かのん」では、かつて同僚だった保育士さんや震災で生徒が少なくなつて非常勤の職場を失った高校の教師ま

でも手伝つてくれているそうだ。かのんの理事長は、事故当時市役所勤務で石神小学校の避難所の担当者だったという。こんな大震災の後だからこそ、これから、自分は何をすべきか、何が大切か見えた、と市役所勤務を辞め、「かのん」のために頑張っている。

常ではない場に突然置かれ、生きる最小限のもので朝を迎える。ある極限状態の中でこそ見えてくるものがある。夢中で目の前の問題に取り組み、過ごしてきた2年間だったに違いない。ようやく、自分の立ち位置を確かめる時になったような気がした。南相馬でたくさんの人達に出会い、とめどなく事故当時の事を話し続けた後、頬杖ついてフツとつぶやく言葉、そのニュアンスを汲み取れるだろうか。

南相馬のお母さんからの手紙



こんにちは。いつもお世話になりまして、ありがとうございます。吹く風も少しずつ温かくなり、庭の花壇には水仙が芽吹いて、春はすぐそまでのようです。おかげさまで息子も1歳6カ月になり、外で三輪車に乗って遊ぶのが大好きで、寒さなど関係なく外に出たがって大変です。

震災から間もなく2年が経とうとしています。あつという間だったようにも感じられるし、遠い昔のことものようにも思えるし、いろいろな体験や思いは、時間の流れを止めたり、早めたりするものなのかも……と不思議な気持ちになります。

震災直後から南相馬のために支援をして下さったJCFの皆さまには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

お返事が遅くなってしまいました。亨平先生への哀悼と感謝の気持ちを込めて、思うことを書き綴りたいと思います。

亨平先生は診療だけでなく、放射線のことについても最新の情報を与えて下さり、また妊婦がどのように生活すべきかのアドバイスもして下さいました。南相馬で子どもを産んでいいのか、正直迷う時期もありました。そういう妊婦の不安な気持ちに寄り添うように、先生はいつも優しく丁寧にデータを示しながら、南相馬の現状や放射線とはどういうものなのかを教えて下さいました。お忙しい中、自宅まで来て下さり、各部屋の線量を測り、線量を下げるときの掃除の仕方まで教えて下さいました。確かな情報と的確なご指導のおかげで、私は安心して家族の元で子どもを産むことができました。亨平先生が南相馬で診療を続けて下さらなかったら、私は家族と離れて、知らない土地で一人子どもを産み育てていたかもしれません。南相馬のために全身全霊を傾けて、天国へ旅立たれた亨平先生。子どもたちの声が響く町になるよう、私も自分にできることで、活動を続けていきたいと思っています。見ていて下さいね、亨平先生。

尾賀 江美



事故から2年 —福島報告—



市民放射能測定所 福島丸森さんと神谷事務局長

横内香苗 (JCF 事務局)

時間の経過とともに……

2013年1月末、神谷事務局長と共に福島駅からレンタカーを借り南馬に向かいました。事務局長は震災直後から、そして私も震災後何度も通った道です。震災後閉店していたお店も再開し、見た目は復興しているかのように見えました。事故から2年になりますが、変化している街の様子、放射能の状況などお知らせしたいと思いません。

最初に向かったのは相馬市にある相馬中央病院。この病院で非常勤医として勤務されている東大医科学研究所の坪倉正治先生にお話を伺いました。坪倉医師はホールボディによる内部被曝検査を行っています。

内部被曝の値が高かった方にJCFが支援している積算線量計（ガラスバツジ）を装着していただきました。その結果、外部被曝線量が高い人が内部

被曝線量も高いとは限らないことがわかりました。内部被曝はあくまでも摂取した食べ物の汚染による事がわかったのです。

福島県内では震災後から2012年3月まで、約5万件のホールボディ検査を行ったそうです。内部被曝が最大値になったのは事故直後でないことからわかるように、内部被曝は摂取する食べ物の影響が大きいのです。

チエルノブイリ原発事故でもきのこが汚染されました。日本人はあまりカルシウムを摂取しない民族のようですが、きのこにも含まれるビタミンDは血液中のカルシウムの吸収を促す働きがあります。坪倉医師は、今後きのこが食べられないと骨粗鬆症の心配も懸念されるとおっしゃいます。実際、鹿島区にある絆診療所の遠藤医師によると骨粗鬆症が増えているそうです。

南相馬では市立病院の他、渡辺病院でもホールボディ測定が可能です。渡

辺病院でホールボディ検査を行っていた池田医師にもお話を伺うことができませんでした。2012年の6月から座位タイプのホールボディカウンターを導入したそうです。この機械は車椅子の方や子ども測定できます。池田医師も食べ物に注意することが必要だとおっしゃいました。実際に値にでると実感するのですが、まだホールボディ検査を受けていない方もいる様子で、関心を向けることは難しいそうです。

南相馬市では来年度、全小・中学生に対して年2回のホールボディ検査を行うことを決定したそうです。

子どもと妊婦を守れない国に

未来はない

震災後の5月から、南相馬市原町区にある原町中央産婦人科のご協力を得て、妊婦さん、子どもたちにガラスバツジを装着していただき、1カ月ごと

の外部被曝線量を測定しました。

病院長である高橋享平医師が昨年末急遽され、その追悼祈念報告会に参加しました。南相馬でホールボディ検査ができるようになるまでの経緯は享平医師のお力がとても大きかったのです。会場内には享平医師が会長を務める除染研究所が構想している南相馬における未来の農業構想のジオラマが飾られていました。ガラスケースの中では水耕栽培実験中の青菜も育っていました。思いついたアイデアをすぐ実行に移す享平医師らは、他にもいろんな場所ですべてを蒔いてくださったと思います。

「いのちは宇宙とつながっているんだよね」と言っていた享平医師のイメージする未来はどこまでも広がっていることでしょう。

まだまだやりたいことが一杯あったと思います。現在病院は新しい医師が引き継いでいます。会長をしていた除

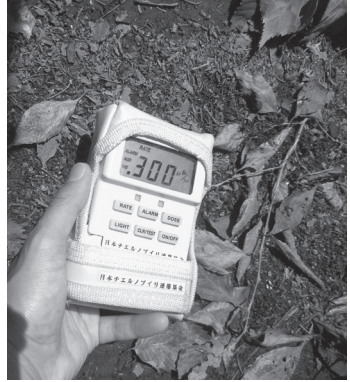
染研究所も息子さんが引き継がれました。

震災から2年。被災された方は時間が経つにつれて当時のことを冷静に振り返るようになります。心の病になったり、事故の影響は見えないところに及んでいるようです。長いスタンスでの支援が必要だと思いました。

ガイガーカウンター貸し出し状況

現在、二本松の幼稚園、宮城県のわかめの会、3a郡山、南相馬の除染研究所、きつずサポートかのん、ふるさと回帰支援センター、群馬の赤城山自然農園にお貸ししています。一度返却された幼稚園も、4月になり新たに入园する園児のお母さん方が使用を希望する場合もあるので再度貸出希望する園もありそうです。

JCFで食品の放射能測定を行っている信州大学生のチームめとばのメン



貸し出したガイガーカウンターで地表の線量測定

バー南山さんが、得意な分野を生かしてガイガーカウンター担当の谷田部さんと一緒に素敵な貸出案内リーフレットを作ってくださいました。とてもわかりやすく、利用しやすいと好評です。郡山市、福島市では各自治会長の家にガイガーカウンターが置かれているそうです。使いたい時に身近にガイガーカウンターがあると良いと思います。

訪問を終えて

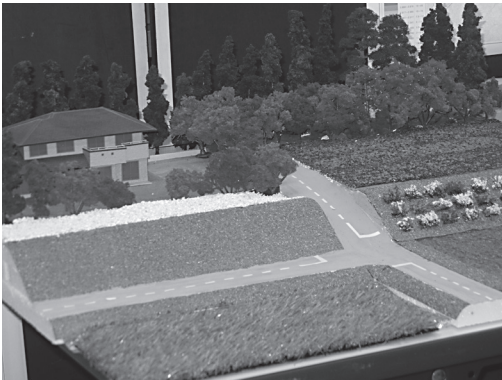
震災後2年と決まっていた仮設住宅は2年延長になったようです。復興住宅も作っているようですが、早急に環境を整える必要があります。手狭な仮設住宅で孤独に暮らすお年寄り、子どもの泣き声に気を使いながら暮らすお母さん達の精神的なご苦労も聞きました。地域による補償の格差も問題です。

南相馬市内の小学校は生徒が減っているそうです。統合を希望する市民もいますが一度学校を無くしてしまうと再開する事が大変のようです。除染作業で集められた汚染土の行先が決まっています。しかし継続しているガラスバツジの線量結果を見ると昨年と変化のない例もあります。今年度のガラスバツジプロジェクトでは数カ月で装着をやめる方もいます。半年か1年装着すると以前のと比較もできて良いと

思います。

汚染は場所によって変わります。引き続きガイガーカウンターやガラスバツジによって放射能見える化するこれが大切です。

JCFでは今後子ども達の保養も考えて行きたいと思っています。



故・高橋亨平先生が構想した南相馬未来のジオラマ

守りたい子どもたちの心と体 JCFと信州大学小児科の検診



子どもの検診を継続して担当される中山医師

中山佳子（信州大学 小児科）

「福島の子どもたちを守りたい」というJCFの熱いおもいを受け、信州大学小児科では2011年7月から「ふくしまっ子検診」を行ってきました。この1年8カ月の間に延べ264人の子どもたちが、松本市の信州大学医学部附属病院を受診しました。

震災からおよそ4カ月後の2011年夏、（株）カタログハウスさんが「ふくしまっ子の夏休み」として福島県内の子ども813人を長野県茅野市に招待しました。この際、希望者を対象とした子どもたちの健康に関する検診の依頼が、JCFから信州大学小児科の小池健一教授のもとに寄せられました。

これまで信州大学小児科は、JCFとの協力によって、ベラルーシやイラクの白血病の子どもたちの医療支援を行ってきた実績がありました。

しかし、今回の福島第1原発事故による健康被害については、すでに国内の専門家から健康被害の懸念は少ないとの見解が示され、福島県内のすべての子どもへの甲状腺がんの早期発見を目的とした超音波検査が決定していました。このため、長野県の小児科医が福島の子どもたちのためにできることが本当にあるのか、懐疑的な見方も正直ありました。

小池教授と外来診療の責任者をしていただいた私は、JCFと

カタログハウスさんから福島現状、子どもたちの健康被害に対する不安や懸念について、様々なお話を聞かせていただきました。その結果、「今我々にできる協力を惜しまない」という結論に至り、小児科医局の仲間と院内の多くの医療スタッフの協力を得て「ふくしまっ子検診」が始まりました。

検診の内容は、体調不良に関する問診、甲状腺の触診を含む全身の診察、血液検査と尿検査です。血液検査では一般的な検査項目に加えて、甲状腺ホルモン、甲状腺刺激ホルモン、サイログロブリンを測定しました。

2011年7月28日から4回にわたり、「ふくしまっ子の夏休み」に参加された子どもたち130人に行った検診の結果は、グランドゼロ第89号（2011年9月26日発行）に神谷さだ子JCF事務局長が寄稿されています。ご参照ください。

驚いたことに、その後も福島や福島から避難した子ども、そして福島以外のホットスポットに住む子どもの受診を希望する問い合わせがJCFに寄せられました。このため2011年10月から毎週月曜日の午前中、JCFを通じて予約された方に個別の検診を継続してきました。検診の内容は当初とほぼ同じであり、医療費は自費診療となるためJCFに負担いただきました。

個別の検診を受けられた方は2013年2月18日までに134人、年齢は生後9カ月から18歳です。震災時の住所は、福島県内の方が最も多く110人、次いで千葉県7人、栃木県5人、茨城県5人、その他の都道府県が7人です。110人の方が自主避難されており、95人が長野県内にお住まいでした。母子避難の家庭が多く、家族が分かれて暮らし、子どもたちは転校などの生活環境の変化を余議なくされたことを実感しました。

検診の結果は、治療が必要な甲状腺疾患の方はいませんでした。血液検査で、甲状腺機能に関して小児内分泌専門医のもとで経過観察が必要と判断された方が4人。貧血や肝機能障害などが偶然発見され、治療や経過観察が必要と判断した方がそれぞれ2人でした。

甲状腺超音波検査は18人の方が福島県または他院などで受けられ、甲状腺にのう胞を指摘された方が9人いました。子どもたちの訴える身体症状としては、頭痛14人、腹痛21人、不眠8人、鼻出血41人、下痢24人、鼻出血と下痢については、震災直後に症状が目立ったものの、次第に軽快している印象でした。繰り返し腹痛があり、後日胃カメラ検査などの精査を行い、治療を受けた方もいらっしゃいました。

この検診を通じ、我々小児科医が子どもたちの健康を守るためにできることが、大きく二つあると思いました。これは

小児科医の使命であるといっても過言ではありません。

一つめは、病気の早期診断と治療。放射線による健康被害はもちろんのこと、貧血などを含めたすべての治療可能な病気を含みます。

二つめは、生活環境の変化や健康被害への不安を背景にした、心と体の体調不良への支援です。腹痛の訴えが多いことは、当初予想した通りでした。大脳と胃腸は自律神経を介し直接繋がっています。緊張すると、急に胃が痛くなったり、トイレに行きたくなることを経験された方も多いでしょう。小児期の慢性的なストレスは、脳腸相関を刺激して過敏性腸症候群を代表とする機能的な胃腸の病気を発症することがあります。安心して年齢相応の日常生活を送れるように、心と体の健康を支援することが必要です。

このような中、2013年2月13日に福島県の県民健康管理調査の検討委員会が、18歳以下の2人が甲状腺がんと診断され、2012年9月の診断例を含め3人に甲状腺がんが判明したと発表しました。厚生労働省が示す「小児の甲状腺がんは100万人に0.1人」の発症率に対して、福島の調査では「小児3万8千人に3人」になります。

現時点では、原発事故による放射線の影響は否定的であるとの見解が示されているようです。チェルノブイリでは事故後4、5年で甲状腺がんが増加しました。しかし、チ

エルノブイリの轍を踏まないように、我が国では18歳以下の小児に超音波検査が行われています。この事実を冷静に、しかし重大な事実として捉え、甲状腺の超音波検査を多くの方が受けられる医療体制をさらに整備する必要があります。

残念ながら信州大学では、検診として甲状腺超音波検査を施行することができません。この点に関し多くの検診希望者の方にご不便をかけておりますことを、お詫び申し上げます。一方、高次機能病院として、検診で甲状腺疾患が疑われた方に対しては保険診療で精密検査を受けていただけます。小児科、内科、内分泌外科の専門医がおりますので、必要な際にはご相談ください。また、子どもの甲状腺超音波検査の検診が可能な病院についてはJCFにお問い合わせください。

「今、あなたの体は健康です。でも、触診ではわからない甲状腺の病気を超音波検査で定期的にチェックしましょう」

放射能による健康被害を心配されるすべての子どもたちや保護者の方に、このような診療を普通に提供できる医療体制が整うことを切に願います。その一端を担えるよう、2013年度も被災地の子どもへの検診をJCFの支援のもと継続する予定です。

2012 年度信州大学小児科での子ども検診支援

◎信州大学附属病院小児科受診者内訳 (2012.4.1～2013.3.31)

震災直後の居住地

都道府県	人数
福島県	46
東京都	2
千葉県	7
栃木県	7
茨城県	4
合計	66

検診時の居住地

都道府県	人数
長野県	37
新潟県	5
山梨県	6
栃木県	4
京都府	3
福島県	9
神奈川県	2
合計	66

受診時の年齢

年齢	人数
0～3歳	16
4～7歳	18
8～11歳	22
12～15歳	9
16～18歳	1
合計	66

◎諏訪中央病院エコー受診者内訳 (2012.10.26～2013.3.31)

震災直後の居住地

都道府県	人数
福島県	7
東京都	2
千葉県	3
栃木県	1
茨城県	2
群馬県	2
神奈川県	1
埼玉県	2
合計	20

検診時の居住地

都道府県	人数
長野県	18
岩手県	1
福島県	1
合計	20

受診時の年齢

年齢	人数
0～3歳	0
4～7歳	7
8～11歳	11
12～15歳	2
16～18歳	0
合計	20

未曾有の困難な中から対処法を模索していった経験を直接聞いた。
福島第一原発事故以来、私達が直面している課題に向かおうとしている今、政治体制や社会の仕組みが違って、問題に向かう姿勢に共感し、自らの足で立ち、歩みだすことができる。

第97次訪問団は、福島県内で、実際に内部被曝線量を測定している坪倉正治医師と石川郡平田村の震災復興支援放射能対策研究所の二瓶正彦さん、佐久間裕さん、そして国内で出産に関してさまざまな情報が流れる中、事実を突き止めたいと出産異常と先天性異常についての聞き取りが目的のJCF理事鈴木真波さん、長年ベラルーシの子ども達をサポートしてきた支援者力丸邦子さんがメンバーだった。

短期間の駆け足訪問と、当日、担当者が不在などとハプニングが相次いだ、現場に即したデータのプレゼンを行い、意見交換することができた。



ゴメリ州立病院産科スペトラーナ医師と話す鈴木理事

97次訪問団報告

ベラルーシにおける

新生児の先天性疾患

鈴木 真波（JCF理事）

【はじめに】

2011年福島第一原発の事故以来聞かれることは、「先天性疾患を抱えた子どもが多く生まれるのではないか」ということだった。私が2002年からほぼ毎年ベラルーシ共和国に通っているということもあり、周囲から「ベラルーシではどうだったんですか？」という質問を受けることが増え、時には「ベラルーシではそのような子どもたちをたくさん見てきたのでしょうか？」と断定的に質問をする方もいた。私は、自分が10年間ベラルーシで見てきたことをそのまま正直に答えている。すると若いお母さん方は、「えっ!? そうなんですか?」と驚くとともに、「よかった!」と安心する表情を見せる。

ただ私が見てきたことは、あくまでもゴメリ州ベトカ地区でのことであって、多くの中の一側面ではない。ゴ

メリ州保健局や支援先の病院でさまざまな話を医師から聞いてきたが、データ収集方法や解析に本当に信頼性・客観性があるのか？ 正しい情報が隠蔽されていないか？ 等の疑問も残る。

私たちは今までベトカ地区で「新生児支援」というプロジェクトのもと、「妊婦と胎児の安全安楽な分娩」そして、「疾患を抱えている新生児の安全安楽な治療」という目標を持って、必要なサポートをしてきた。

その間、周産期における原発事故との関係について話を聞く機会は多々あったが、特に注目すべき情報はなく、私たちもそれ以上追究することはなかった。

しかし福島事故以来、出産や子ども疾患について私のまわりで心配をしている若い方が増え、正しい情報を求めていることを実感し、改めてベラルーシ共和国メリ州の周産期に関する情報収集を行う必要があると感じ

た。そのため、今回の渡航では、メリ州保健局とベトカ地区病院で話を聞くことにした。

【ゴメリ州保健局】

渡航前に保健局の局長とのアポイントメントを取っていたが、局長は当日出張命令のため留守。結局会うことはできなかった。その代わり、医療課長と小児科医から話を聞くことができた。

ゴメリ州の周産期に関する統計は保健局にはなく、州立病院で管理しているとのこと。1986年以前の統計もあるはずだが、データを取っているだけで分析はしていないという。つまり、チェルノブイリ原発事故との関連は不明ということである。

この統計を見たことがある小児科医は、「近年小児の疾患が増えてきたと感じている」と話していた。しか



ゴメリ州立病院に支援した試薬

し「小児疾患の増加は世界で起きている問題であり、妊婦の疾患も増加しているから当然である」と述べていた。1986年前後で先天性疾患の変化があったかについては、「ベラルーシではその場合、中絶をするので目立った増加はなかった」とのこと。では、86年以降中絶は増えたのか？ しかし86年以降しばらく妊娠をしない女性が増えたと言われているので、中絶も先天性異常も増えていないのかもしれない

い。様々な考察ができるが、今回の渡航時は州立病院を訪問しようと思う。

【ベトカ地区病院】

ベトカ地区病院とJCFは深い信頼関係が築けているため、産婦人科医であるナージャ院長に、事故と周産期に関する詳しい話を聞きつつ、データをj得ることができるのではないかと思っていた。しかし残念なことにナージャ先生はご家族の不幸があったため、今回の訪問では会うことができなかった。

ナージャ院長は今まで、「86年の事故後も、子どもの先天性疾患は増えていない」と、独自の統計を元に断言しており、次回渡航時には詳細を確認したいと思う。

ナージャ院長には会うことができなかったが、副院長のジーナ医師（小児科医）とバレンチーナ師長に、障がいを持ってjいる子どもの施設訪問がで

ないか聞いてみた。

障がい者施設はベトカ地区にはなく別の地区のため、アポイントメントが必要とのこと。子どもの障がい者施設はゴメリ州に1箇所しかなく、発達障がいのある子どもの施設である。また、ベトカ地区には孤児院（遺棄施設）があるが、その多くがアルコール中毒の両親のネグレクトから保護された子どもたちである。次回渡航時は、障がい児施設訪問と、各地区の孤児院の役割について情報を得たいと思う。

【まとめ】

この10年間毎年のようにベラルーシに渡航する中で、現地の医師たちから「先天性疾患と原発事故の増加は見られない」と言われ続けていた。

またベラルーシの周産期（出産前後の期間）医療の向上により、より難し

いケースの子どもたちが助かるようになり、そのことが「ベラルーシでは事故の影響による先天性疾患を持つ子どもたちが増えている」と伝わってしまっているのではないかと考えることもある。

JCFでは今までベラルーシの周産期に関する統計を扱ってこなかったことを福島の事故後に改めて気付き、私は「もう一度ベラルーシを見直さなければ」という思いに駆られている。それは私が助産学が専門の看護師だからであり、また、今後妊娠を望む一女性だからでもある。

これからも多くのことをベラルーシは私たちに教えてくれるだろう。

ベラルーシ訪問を通じて

坪倉 正治

(東京大学医科学研究所)



ベトカ地区病院でカルテを検証（右から）坪倉医師、副院長、イリーナさん

2013年3月20日から3月26日まで、JCFの第97回訪問団に同行し、ベラルーシのゴメリ、放射線医学研究所、ゴメリ州立病院、ゴメリ保健局、ベトカ地区病院にお伺いしました。ゴメリのホテルで眠ったのは一泊のみというスケジュールでしたが、その中でも本当に様々なことを経験し、理解、確認することができました。

私は元々、血液内科を専攻しており、放射線被ばくとは異なる分野で働いていた医者です。東日本大震災当時、東京にある病院の骨髄移植病棟で働いておりました。ご縁があり、震災1カ月後から相双地区で医療支援をするようになり、今現在も、原発から北に23kmにある南相馬市立総合病院や相馬中央病院、ひらた中央病院などで非常勤医として診療のお手伝いをさせていただいております。その中で、内部被ばく検査を始めとする被ばく診療に携わる

ようになり、今回のような機会を頂くに至りました。

JCFの皆様とは、震災後南相馬市に唯一残った産婦人科医である、故高橋享平先生にお会いした際にご紹介いただいたのが最初です。当時、現地には放射線を計測する器械は何も無く、現状把握もその対策も何も打つことができないという状況でした。私は高橋先生の患者さんが求めているガラスバッジを、東京で手に入らないか探していました。結局、手に入ったのは旧ソ連軍製の古い器械で、定量がしっかりとできるものではありませんでした。そのときにいち早くガラスバッジを届けてくださったのがJCFの皆様でした。

南相馬市での内部被ばく検査は、高橋先生のご尽力もあり、早期にホールボディカウンターの導入にこぎ着けま

した。2011年の7月より、全ての住民を対象とした健診が行われており、今も淡々と続いております。結果は、南相馬市のホームページでも公開されておりますので、ご参考下さい。

学校検診への組み込みや、継続検査、食品測定との連携、放射線に関する勉強会の開催など、多くの取り組みを行う中で、現在の検査体制の不備や問題点も浮上していました。その問題点对する解決策が無いか、何か見落していることや、よりよい対応法、今の日本で欠けている視点が無いかを見たという気持ちで今回の訪問団に同行させていただきました。

一番印象に残ったことは、継続的な検査が26年たった今でもしっかりと行われているということでした。年に一度、無料の健康診断という形で、内部被ばくの検査とその他の健診が行われてい

ました。継続的に検査を行っていく必要性があることを、スタッフ全員が理解しており、当然のように淡々と検査が続いていることに感銘を受けました。日本も今のままでは継続的に検査するの难道うかもはっきりしていません。内部被ばく測定やガラスバッジに関して言えば、そもそも誰がやるのかもいまひとつはっきりしていません。基本的なことですが最も大事なことで、と再認識しました。

そして、ベトカ地区病院での検査の大まかな傾向および原因は、今現在の南相馬と大きく変わらないことも確認できました。今現在の内部被ばくの原因は継続的な汚染食品の摂取によること。時期によっても異なるが、ベリー類とキノコ類が主たるリスクであること。特にキノコ類は内部被ばくの原因全体の70〜80%程度を占めているというところ。全体の傾向は今現在の福島と

同様です。

実際に内部被ばく値の高い人に対する対応の重要性も再認識しました。マッシュルームとベリーに関する注意事項や、食材を煮る際の注意点、食品による放射性物質の差などを十分にお



ベトカ地区病院副院長のジーナ医師（中央）と坪倉医師（右隣）



環境センター前で前列右から力丸さん、イリーナさん、鈴木理事、後列右から、坪倉医師、佐久間さん、二瓶さん

話しすること。もし値の高い子がいたなら、その子の親を呼び出し、生活習慣についての指導を行い、3カ月後再検査を行う。といった、まだ福島ではしっかりと根付いていない、個別に綿密なフォローをどのように行うかについて多くの示唆をいただきました。

今の南相馬では、意識が薄れたことによる内部被ばく検査の受診率低下は

大きな課題となっております。継続的な検査をどのように維持するか、住民の方々に継続的に検査することがなせ重要なのかをお伝えする方法を試行錯誤しています。ベトカ地区病院でのホールボディカウンターが置いてある場所、どのように、いつ患者さんに受けてもらうか、他の健診と内部被ばく検査を組み合わせたり、外来受診と一緒に検査したりと言った工夫など、一つのノウハウが今の我々がまさに必要としている情報でした。今後南相馬でもその知見を生かして、よりよい形に変えて行けるよう働きかけたいと思っています。

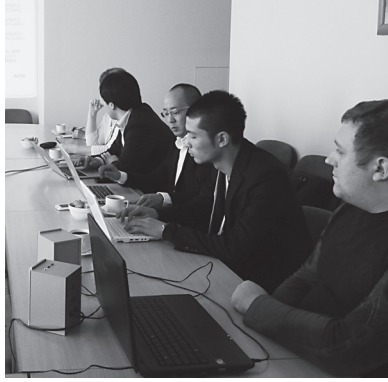
経験や情報量の差はありますが、今の南相馬やひらた中央病院で運営されているシステムは酷似している部分が多くありました。手探りで今まで進んできた我々に取って、どこか不安のあった現在のシステムですが、大きな

方向性が現在のベラルーシと同様であることを確認できたことは、我々にとって大きな自信となりました。ただ、このような軌道に乗るまでには10年近くの時間がかかったともお聞きし、今後もひとつひとつ問題点をクリアし進んで行かなければならないことを再認識しました。

これらは、多くの現地の方が時間を惜しまず、我々に様々なことを教えてくれたおかげです。関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。

今後の福島での 検査体制を模索

二瓶 正彦（公益財団法人
震災復興支援放射能対策研究所）



保健局で二瓶さん（左から二人目）

平成25年3月11日東日本大震災から2年が経過しました。私は今回、JCFのご協力によりベラルーシを訪問させていただきました。

私は、東京電力福島第一原発から南西に約45kmに位置する『公益財団法人震災復興支援放射能対策研究所』の二瓶正彦と申します。

東京電力福島第一原発事故後、警戒区域の介護施設から小学校に避難を余儀なくされた高齢者を救済し、170名を超える高齢者の受け入れ先となりました。

その後、救済した高齢者の家族が病院に見舞いにみえた時に、「祖父母の安否が確認できてよかったが、今後は子どもの内部被曝が心配」という声を聞きました。放射能に対して不安を抱いている方が非常に多く、私も福島県の子ども達、そして我が子の内部被曝が心配でした。

当法人では、平成23年10月にホールボディカウンターによる内部被曝検査を開始して、翌年の2月には、食品検査、今年の3月からは甲状腺検査を開始しました。ホールボディカウンター

検査開始から約1年半が経過していますが、私たちの検査体制をそのまま進めていいのか、新たに構築しなければいけないことがあるのかという点を確かめるために、放射線医学人間環境センター・ベトカ地区病院等に研修に行かせていただきました。研修の結果、まず今の検査体制を継続することが大切であるというのが一番の感想です。

ゴメリ州では、26年経った現在も継続的に年に1回、健康診断としてホールボディカウンターによる内部被曝検査・血液検査・甲状腺エコー検査を実施しています。継続的に検査を実施していく必要性があることをみなさんが理解していることに納得しました。また、ベラルーシ（ゴメリ州）での検査体制は日本（福島）も見習っていくべきと感じました。

福島県民の健康管理に少しでも貢献できるように、今後も頑張っていけます。



ドイツ・マインツの脱原発便り



マインツでの抗議活動に参加する柳田さん（右手前）

福島原発被災者支援に寄付を寄せて下さっているドイツ「マインツ友の会」の柳田逸枝さんが、昨年末、一時帰国の折に、JCF事務局を訪問して下さいました。柳田さんのお話が興味深く、是非にとお願いして本誌にマインツ便りを寄せて下さることにになりました。

マインツ友の会

はじめまして。マインツ友の会 (Mainzer Freunde fuer Japan e.V.) 以下 MFFJ) の柳田逸枝です。

マインツはドイツのライン川沿いの人口20万人の美しい大学町で、『MFFJ』は東日本大震災の直後に、仙台に住む私の友人の炊き出し資金を集めるため自宅でチャリティーパーティーをしたのがきっかけで設立したドイツのNPOです。マインツまで来られなかった欧州の友人達から別途6千ユーロを超える募金があり、個人の活動として続けていく限界を感じたためMFFJを設立しました。ドイツ人の友人達に協力してもらって必要書類を揃えたのですが、20代〜30代の彼らの多数がすでに何らかのNPOに関わっていたことには驚きました。「ドイツ人が3人集まると何かしらの団体ができる」と言われているほど、普段から趣味の会や社会的活動を組織的に運営することが好きな国民性なのです。学校や家庭で積極的に自分の考えを発表し、議論し、行動につなげることが評価されるのが、こうして実際に社会に生きているんだなど実感した瞬間でした。

これまでに市内での習字パフォーマンス・募金活動をはじめ日独サッカー親善試合、チャリティー居合道授業、異

文化国際交流祭、子供祭への参加をはじめ、マインツ近郊のオッペンハイム小学校と南気仙沼小学校の交流のお手伝い、オッペンハイム小学校での授業、気仙沼小学校での授業など約30回の活動を行ってきました。2012年3月11日には米タイム誌等で活躍しているカメラマンのアンドレアス・ザイベルト氏が撮った被災地の写真や独日小学生交



マインツ友の会の第1回募金活動

流の手紙とともに、日本における原発政策の内容も紹介する展示会を開き、ドイツ人の訪問者からたくさん質問を受けました。

ご存知のようにドイツの首相アンゲラ・メルケルは福島事故直後に2022年末までの脱原発を宣言しており、国民の大部分に支持されています。日本政府に対しても、脱原発にむかつて協力は惜しまないと発言しています。

マインツにおける脱原発の動き

マインツでは2010年9月より「反原発・月曜日の散歩」という形で、最低でも毎月1回デモが続けられてきました。開始のきっかけは、当時のドイツキリスト教民主同盟(CDU)・ドイツ自由民主党(FDP)の連立政権が、前SPD(社会民主党)政権が決定していた原発撤退時期を延長することを決定したことへの反対でした。

旧東ドイツで月曜日にデモをする習慣があり、それが各地に広がってベルリンの壁崩壊につながっていった歴史があるため、伝統的に市民の抗議運動は月曜日に行われることが多いようです。

今年の3月11日にはドイツ全国201の場所で「Mahnwache(行進ではなくスピーチやAtomkraft?)

ZeinDankei (原発? ノーサンキュー!)」の旗をもつて意思表示)が開催され、9200人が参加しました。氷点下のマインツ中心地でも約20名が集まりました。

参加者は、学生、医者、農家、主婦、環境活動家などなど多様な背景を持った市民。歩行人に対して以下のようなよびかけがありました。

「日本、そして福島と連帯しよう。地震、津波、原発事故による多数の死者・負傷者、そして、故郷を失った哀しみ、進行する健康被害への不安、そういう苦しみ寄り添う気持ちを持つとう。日本の各地で、無責任な電力事業者や政治家に対して、反対の意思を示す行動をしている人たちを応援し、世界的な原子力の撤廃を目指して、再生可能エネルギーの拡張、子供たちの未来のための暮らしの交換を進めていこう。ドイツ国内においても再生可能エネルギーの買取価格の下落という逆風も吹いているけれども、上から(国)の取り組みを待つのではなく、下から(地域・市民)の手でエネルギーシフトを成し遂げよう」

直前の週末である3月9日には、全国で開催されたデモに2万8千人が参加しました。チエルノブイリ事故から27年の4月21日にも全国規模のデモが予定されており、現時点で2つの原発前での反対アクションが計画されています。

私は両親に連れられて熊本や水俣で原発のデモに参加したことが何度もあるのですが、当時は市民の関心もあまり高くない、子供心にデモに参加するのは好きではありませんでした。しかし今回マインツでの集会に参加して、自ら脱原発を表明し国民の大部分がそれを支持しているこの国での原発活動への視線は20数年前の日本でのそれとは明らかに違うなと感じました。関心がなさそうな人もたくさんいますが、原発以外にも労組のデモ等しよつちゆう市民が路上にでるお国柄なので、理解があります。

大学の友人が松本市に住んでいることもあり、2012年12月に思い切ってJCFの事務所を訪問させていただきました。それがきっかけで今後ドイツでの活動や原発政策に関しての記事を書かせていただくことになりました。会員は約30名の小さな団体ですが、松本のJCFとの協力を進めていきたいと思えますので、今後ともよろしくお願いたします。

2013年3月19日 柳田逸枝(マインツ友の会)

—人類と地球を守る天地の摂理—

議員と市民の院内集会

横内香苗（JCF事務局）

4月2日、スタッフ2名で『脱原発政策実現全国ネットワーク』主催の院内集会に参加しました。衆議院議員第2議員会館にて行われた集会のテーマは「福島原発4号機及び全国の使用済み燃料の問題を考える」です。一般の方だけでも120名が参加されたそうです。

昨年3月に開かれた国会での予算委員会公聴会で「核を推進する国に対する最大の貢献は、その国を核の恐ろしさに目覚めさせること、これこそこういう国々に対する最大の貢献である」と述べた村田光平さんも早くから会場にお越しになっていました。

事務局のストッブ・ザ・もんじゅの方々は遠く関西からさまざまな準備を整え、議員に呼びかけ、この会を設けて下さいました。

まず村田光平さん（元スイス大使）、澤井正子（原子力情報室）、中嶋哲演（原発設置反対小浜市民の会）が力強く会議

に対する意思表明をしました。

その後挨拶した川田龍平議員は「行政のシステムを変えていきたい」、福島みずほ議員は「福島第一原発4号機や全国の使用済み核燃料の問題が解決しない中、原発再稼働を進めるのはおかしい」と発言。また福田哲郎議員は震災当時内閣官房副長官を務めた方でしたが「あの時の事は一生忘れない」と言っていました。

二度と悲劇を繰り返さないためにも体験は教訓として生かさなければなりません。しかしその後の東京電力・資源エネルギー庁への質問に対する回答は、それを覆すかのような内容でした。

前回の会議で質問された内容の中ではつきり回答を得られなかった事に対して市民側がさらに追求すると「直接の専門家ではないのでわかりません」とか「存じ上げません」という返答に会場内がざわつきました。

さらに「日本の使用済み核燃料を入

れる格納容器があと6年で満杯になることを知っていますか？」という質問に対してはどなたも現実を知りませんでした。原発の耐震に関する質問に対し原子力規制庁からの回答は、「福島第一原発4号機の耐震強度は、原子炉建屋、使用済み核燃料プールともども、震度6強」との回答でした。万が一大地震が起きたら大変な事故になり兼ねません。再稼働なんてとても不可能です。

来場していた双葉町の元町長の井戸川克隆さんが、「使用済み核燃料容器に海水はどの程度入っているのか？」と質問しましたが誰も答えることができず、「4号機の使用済み核燃料の危険な状態が解決せず、放射線量が高い双葉町に町民を帰すことに決めたのはなぜか」と迫りました。

答えることのできない各代表者に対し「危険な地域とわかって町民を帰すことを決めたのだと理解した」と言う



東電にジルコニウム火災(*)対策署名を提出する
ストップ・ザ・もんじゅのグループ

と会場から共感の拍手が湧きました。地元の行政にさえ事実が伝わっていないかっただけです。井戸川さんは在職中、子どもたちの健康を一番心配し、避難基準値が高い事を指摘していました。職を辞した後には事実を伝えるために懸命に動いていらっしやいます。事実を隠すシステムは原発事故に始まったこ

とではありません。

会場全体の雰囲気は前向きな希望が見えませんでした。こちら側とあちら側がにらみ合うのではなく一刻も早く危険な原発の停止と処理の行方を決めて欲しいです。

「経済重視から生命重視への移行が人類と地球を守る天地の摂理です」と言った村田光平さんの言葉が印象的でした。

昨年廃案となった脱原発基本法案を3月に提出したそうです。

「未来を目指す議論をして欲しい！」と提案した議員のように原発がいらない社会の方向性をはっきりと示して欲しいと思います。

*今、最も危険な状態にある4号機プール内にある使用済み核燃料は、万が一大きな地震がきて空気に触れると、ジルコニウム火災という大惨事が起きる可能性があります。

JCF-Team めとば測定室 今後の課題



信州大学理学部の学生で結成されたTeamめとばが「信州大学同窓会連合会賞」を受賞しました！

中澤 啓子（事務局）

昨年未、民主党から自民党に政権が変わり、安倍首相は原発容認の方針を明言。

東日本大震災から2年たっても福島原発の放射能汚染、瓦礫処理など収束のめどはたっていない。これらの問題と核のゴミ処理を優先的に考えてほしい。

福島第一原発事故の被害も「除染済み」、「帰村宣言」などで縮小化されて行く様に思える。しかし福島県以外で高濃度に放射能汚染された場所（ホットスポット）が検出されたり、県内の身近な場所から測定所に持ち込まれる検体の中にも、こんなに高い測定結果が検出されるのかと驚くこともある。また福島第一原発の港湾内で捕獲されたアイナメに74万ベクレル/kg検出等海の汚染状況を考えてと、食料品店で海産物には手を伸ばせない方も多いと思う。

この様ななか、子どもたちを放射能

から守るために、今自分たちには何ができるのだろうか？

測定の現状と日ごろ感じていることや、改善したいことなどを項目に沿いながら述べてみたい。

給食測定

松本周辺の子どもを持つ親御さんは、現在内部被曝を心配し食事面には特に気を使う。

前々回の本誌で、給食の測定について検出限界を下げたいと書いた。この検出限界値25ベクレル/kgは国の基準値よりは下ではあるが、内部被曝を防ぐ目的と親御さんの心情を考えるとこれで本当によいのか？

Teamめとばと話し合いながら、現在の機器で検出限界をもっと下げよう以下のように工夫をした。

給食測定は今までバッググランドを午前中120分かけて測定し、事前測

定（もし食材から放射能が検出された場合は給食への使用中止できる）原則で、松本市への報告時間が決められているが、市への結果報告の時間ぎりぎりになるまで測定し、検出限界をCs合計10ベクレル/kgにしようとしてきた。さらに他の測定所のバッググランド測定方法（前回測定時のバッググランド使用）を参考にし測定時間調整をし、チームの勤務状態も考慮し、120分測定をチームの測定できる時間ぎりぎりの270分にして測定結果がどのくらいになるか提案し試みた。

定量でこの時間測定すると検出限界は一桁に下がる。この結果から給食測定日の前日の夜バッググランドを測定し、午前中から給食測定をしていくようにチームと話し合った。現在Teamめとばが対応できない時間帯は、事務局スタッフがカバーし測定している。

現在検出限界は一桁台で測定できて

いる。今後は魚や水産物の測定も現在より多めに取り入れ、自分たちも海の汚染状況や影響を正しく認識しつつ、情報提供し継続的に測定していききたい。

一般測定依頼窓口として

事務所に測定を依頼に来る方は、保育園の焼き芋会に使用する落ち葉が心配、子どもがいるがストープの薪や灰が心配、孫に米や野菜を送りたい、実家に帰ったときに心配なので庭の土を持ってきた、等さまざま。そのときの様子で毎日食べるものなど頻度により長時間測定をすすめたり（同金額、行事に使用するものは曜日にあわせて順番を変更させてもらったりしている。測定依頼者への結果説明についてTeamめとばが対応しているが、詳しい説明がほしいと希望される方には三輪先生に説明をお願いし、お話しした

だいている。

また測定結果表は専門用語やスペクトルの見方など難しいことが多い。一般の方にもわかりやすい解説書をチームに依頼し、作成してもらったりもした。

また何回か測定依頼された方と話をする中で、測定結果ばかりを気にするのではなく、放射性物質吸収を減少させ体外への排出を促す発酵食品を利用し料理作りをしたいとのこと、料理教室の企画もした。（2月28日実施。本誌44ページ「松本の食卓」、52ページ「こんにちは」参照）

自分としては専門家でない分、できるだけ依頼される方と同じ目線にたち、細かいことに留意し、気持ちに沿って測定していきたい。親御さんが元気になる子どもさんにも精神面でプラスになることがあるのではないかと思う。

長野県測定室連絡会

発足から4回目の連絡会が開催され、2月2日にはJCF事務局に於いて、6測定所の話し合いがあった。

それぞれの測定所の測定器は違うがお互いの測定方法（バッググラウンドの扱い方、測定器の補正係数を求めるためのV11容器とマリネリ容器の違いや、一検体に長時間かけ下限値を下けている）など実際の測定に関すること、給食測定、県への要望書の提出方法などの情報交換をした。

前回の話し合いの折にもめとばの佐藤さんが話し合いの内容をすぐに取り入れ恒温ボックスを手作りしてくれ、現在スベクトルが格段に安定している。

また検体の量が少ないときに正しい測定結果を出すための補正係数作りは現在準備段階として標準米を長野の測

定所よりお借りして、Teamめとばが少しずつ実験している。

この様に長野県市民測定所連絡会は、実際の測定に関しては各々測定器がちがっても、工夫することですぐにでも生かせられることもあり、とても参考になる。また専門的で高度な知識も話し合われ、Teamめとばには刺激となることも多いようだ。Teamめとばにもできるだけ多く声をかけ一緒に参加していきたい。

測定所訪問

さる2月7日に測定所連絡会の参加者で、Ge（ゲルマニウム）半導体検出器を所有している「アイメジャー信州放射能ラボ（代表一ノ瀬修一さん）」の測定室に、クロスチェック測定をお願いしながら、神谷事務局長、Teamめとばの浜崎さんと一緒に伺った。以前からGe半導体の測定器とJCFの測

定器NaI（エヌエイアイ）シンチレーションとの測定器ほどの程度の違い（検出可能核種、検出限界）があるかに興味もあつた。また側定環境で自分たちの測定所の参考にできる部分もあるかと思ひ測定所内の案内もしていた。

Ge検出器はどのような大掛かりな物かと思つたが、現在液体窒素ではなく電子冷却装置を使用することと意外とコンパクトだった。



検体を扱う時には必ずキッチンペーパーを使用する

しかし装置はコンパクトでも電気料は結構かかるとの事。またGe検出器はエネルギー分解能（X線分光器などのエネルギーアナライザの性能）が良いので核種もNaiより明確に分析できる。

その横には一ノ瀬さんが金庫に鉛を張り製作した遮断箱が置かれ、高濃度に汚染された土壌の管理を行っていた。

室内の床はクロス張りで拭き掃除が基本とのこと。毎日の掃除チェック表が作成されていた。また持ち込まれた物で秤や机上が汚染されないように必ず間にキッチンペーパーをはさむなど細かいところまで、気を使い安全管理をしていた。

その時点ではJCFの測定室の床は絨毯ばりだった。測定する部分はビニールシートを敷いてあるが、飛沫等安全管理の面では反省点も多い。そこで床全体を拭き掃除ができるものに替えたいと思い、Teamめとばの坂本さんと床に敷くクッションフロアとモッ

プを購入、後日坂本さん、倉田さんの二人が、日曜出勤をし重い測定器を移動させ隔々まで敷いて測定室をリニューアルした。めとばの方たちは本当にフットワークがよく、とても助かっている。これからも他の測定所からも情報を頂き、参考にできることはTeamめとばと話し合いながら改善し測定環境を整え、測定に臨みたい。

一ノ瀬さんは専門知識も豊富で、講



アイメジャー信州放射能ラボ・代表一ノ瀬修一さん

演もしていらっしゃるとのこと。Teamめとばとの勉強会も計画していきたい。

（クロスチェックの結果等専門的な報告は次号で浜崎さんより報告予定）

自分の閾値を

放射能汚染は目に見えない、しかも現在も原子炉からは放射能は出続けている。今、低線量被曝の影響を心配する声も多くなってきた。この様な状況の中で子どもを守るために何が重要なのかを見極めていきたい。

そして再三言われているが過度に恐れることなく過度に無関心にならないように、測定を継続し、その結果をひとつの判断材料とし、一人一人が現在の汚染の実態と影響を正しく認識し自ら判断しこれだけはしたいという自分の閾値しきい値を設け、折り合いをつけて暮らしていく必要があると思う。

506	大根	神奈川県	12月20日	1130	120	ND	4.1	ND	4.6	4.6
507	かつおぶし	国内	12月21日	410	900	ND	3.7	ND	4.3	4.3
508	天然ブரி	北海道	12月25日	1069	90	ND	5.0	ND	5.6	5.6
509	白菜	国産	12月25日	556	90	ND	8.8	ND	9.9	9.9
510	しいたけ	長野県長野市	12月26日	740	200	ND	4.6	ND	5.2	5.2
511	米	長野県長野市	12月26日	1019	900	ND	1.6	ND	1.8	1.8
512	大豆	長野市大岡	12月27日	859	900	ND	2.0	ND	2.3	2.3
513	キャベツ	愛知県	12月26日	995	150	ND	6.4	ND	7.2	7.2
514	にんじん	千葉	12月27日	928	120	ND	4.9	ND	5.5	5.5
515	洗いごぼう	青森	1月7日	504	120	ND	8.5	ND	9.7	9.7
516	りんごピュール	長野県内産	1月8日	954	120	ND	4.7	ND	5.3	5.3
517	土	東京都稲城市	1月9日	999	120	82.9	15.4	49.5	10.3	4.9
518	セロリ	愛知県	1月9日	1016	120	ND	4.4	ND	5.0	5.0
519	あんこう	新潟県	1月10日	730	120	ND	5.9	ND	6.7	6.7
520	灰	長野県松本市	1月11日	493	180	33.7	7.0	11.7	6.5	6.6

食品衛生法上の基準値（厚生労働省 医薬食品局食品安全部 平成24年4月1日施行）

放射性セシウム	飲料水	10 Bq/kg
	牛乳	50 Bq/kg
	一般食品	100 Bq/kg
	乳児用食品	50 Bq/kg

NDとは検出限界値未満のことです。検出限界とは有為な放射能を検出することのできる下限値です。有為な放射能とは、統計的に見て、バックグラウンド値と明らかに異なる放射能が検出されたと判断できるといふことです。（単位：Bq/kg）放射能濃度と検出限界には誤差があります。*同じNo.のデータが重複しているものは、検査時間などを変えて再検査したデータです。

JCF-Team めとば食品等放射能測定結果（測定結果公表可のデータのみ）

2012年12月～2013年3月

NO.	試料名	産地	測定開始		重量 (g)	測定時間 (分)	セシウム137		セシウム134		セシウム134		検出限界
			月	日			誤差(3σ)	検出限界	放射能	誤差(3σ)	セシウム134		
484	白だし	愛知県	12月	5日	1050	180	ND	ND	3.5	ND	ND	3.9	
485	りんご	長野県小布施市	11月	30日	959	150	ND	ND	4.2	ND	ND	4.7	
486	土壌	長野県松本市	11月	30日	1038	560	ND	ND	2.9	ND	ND	3.1	
487	玄米	長野県松本市	12月	4日	1004	900	ND	ND	1.6	ND	ND	1.8	
488	ホタテフレーク	埼玉県戸田市	11月	29日	1036	90	ND	ND	4.9	ND	ND	5.5	
489	EM土壌	群馬県みどり市	12月	4日	1047	60	290.9	53.2	7.9	181.9	33.5	15.2	
490	シーチキンフレーク		12月	3日	1000	90	ND	ND	5.2	ND	ND	5.9	
491	ゆず	千葉県佐倉市	12月	11日	1190	120	7.4	2.0	2.5	5.6	2.7	2.6	
492	レモン汁	国産	12月	6日	1001	120	ND	ND	4.5	ND	ND	5.1	
493	ボルシチ		12月	6日	1061	120	ND	ND	4.3	ND	ND	4.8	
494	ミルク		12月	7日	646	120	ND	ND	6.8	ND	ND	7.7	
495	田作り小魚	国産	12月	11日	227	300	ND	ND	11.6	ND	ND	13.2	
496	こんぶ	北海道	12月	12日	260	180	ND	ND	14.0	ND	ND	16.2	
497	庭の枯れ葉	千葉県柏市	12月	14日	238	900	1112.1	200.6	6.8	729.6	131.9	11.4	
498	玉ねぎ	北海道	12月	13日	775	120	ND	ND	5.6	ND	ND	6.3	
499	レモン汁	国産	12月	13日	1003	120	ND	ND	4.5	ND	ND	5.0	
500	ミルクココア		12月	14日	649	120	ND	ND	6.8	ND	ND	7.6	
501	煮干し	国産	12月	19日	680	900	ND	ND	2.4	ND	ND	2.8	
503	海老	インド洋	12月	17日	661	90	ND	ND	7.5	ND	ND	8.3	
505	なると	国産	12月	20日	1159	120	ND	ND	3.9	ND	ND	4.4	

544	杏仁豆腐	愛知県名古屋市	2月5日	1254	120	ND		3.6	ND	4.0
549	しょうが	高知県	2月6日	1043	270	ND		2.9	ND	3.2
550	チンゲンサイ	愛知県	2月12日	945	120	ND		4.9	ND	5.5
551	さつまいも	千葉県	2月13日	870	140	ND		4.7	ND	5.3
552	りんごピューレ	長野県	2月14日	986	150	ND		4.0	ND	4.5
553	あま酒	長野県松本市	2月15日	987	210	ND		3.4	ND	3.9
554	もち米玄米	長野県松本市	2月18日	1126	420	ND		2.2	ND	2.5
555	こうじ	長野県松本市	2月19日	810	150	ND		4.8	ND	5.4
556	ママレード	国産	2月20日	994	120	ND		4.4	ND	4.9
557	つぼ漬	国産	2月21日	946	150	ND		4.1	ND	4.6
558	やまびこしめじ	長野県上高井郡	2月22日	1142	900	ND		1.5	ND	1.7
559	ピーマン	宮城県	2月22日	765	150	ND		5.1	ND	5.7
560	にんじん	愛知県	2月25日	631	150	ND		6.1	ND	6.8
562	チーズ	国産	2月26日	1003	150	ND		3.9	ND	4.4
563	チキンガラスープ	国産	2月27日	990	150	ND		4.1	ND	4.7
568	さば	ノルウェー	2月28日	1050	180	ND		3.5	ND	3.9
569	れんこん	新潟県	3月4日	844	270	ND		3.5	ND	3.9
570	じゃがいも	北海道	3月6日	900	300	ND		4.5	ND	5.1
571	ちくわ	北海道	3月7日	900	300	ND		3.1	ND	3.5
573	ししゃも唐揚げ	ノルウェー産	3月12日	980	180	ND		3.8	ND	4.3
574	ホールコーン	北海道	3月13日	856	300	ND		3.7	ND	7.0
575	ネギ	千葉県柏市	3月14日	632	120	ND		7.6	ND	14.3
577	イカリング	北太平洋	3月15日	1008	300	ND		3.1	ND	5.9

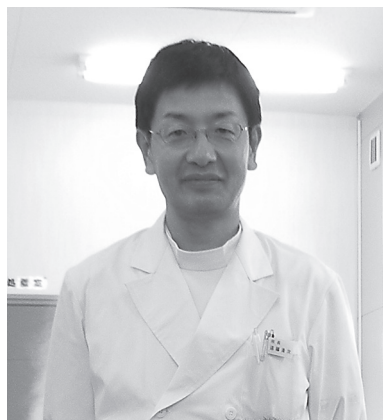
NO.	試料名	産地	測定開始		重量 (g)	測定時 間(分)	Cs-137		Cs-137		Cs-134		Cs-134 検出限界
			月	日			放射能	誤差(3σ)	放射能	誤差(3σ)	放射能	誤差(3σ)	
521	土	茨城県筑波市	1月	24日	1147	60	124.5	23.2	5.8	71.0	13.7	10.1	
522	酒かす	国産	1月	18日	962	60	ND		6.4	ND		7.1	
523	米	長野県松本市	2月	8日	1123	900	ND		1.5	ND		1.6	
524	雪融け水	JCF事務所 駐車場の雪	1月	15日	969	120	ND		4.5	ND		4.9	
525	生姜	高知県	1月	16日	792	150	ND		4.9	ND		5.6	
526	長ねぎ	群馬県	1月	17日	592	120	ND		7.2	ND		8.1	
527	切り干し大根	長野県松本市 (乾燥：松本市北部)	1月	22日	288	900	ND		5.5	ND		6.4	
528	切り干し大根	長野県松本市 (乾燥：松本市南部)	1月	24日	280	900	ND		5.6	ND		6.4	
529	焼却灰(炭)	長野県松本市	1月	25日	380	900	ND		4.4	ND		5.0	
530	白菜	長崎県	1月	18日	453	135	ND		8.4	ND		9.6	
531	ぬかみそ	長野県松本市 (購入)	1月	21日	1042	120	ND		4.5	ND		5.1	
532	スイートコーン	北海道	1月	22日	956	120	ND		4.7	ND		5.3	
533	パセリ	愛知県	1月	24日	357	540	ND		5.5	ND		6.2	
534	かまぼこ	北海道	1月	24日	1020	120	ND		4.3	ND		4.8	
535	はっさく(果実)	和歌山	1月	28日	979	120	ND		4.6	ND		5.2	
536	はっさく(皮)	和歌山	1月	28日	939	120	ND		4.7	ND		5.4	
537	小松菜	愛知県	1月	29日	827	120	ND		5.3	ND		6.0	
538	土	東京都葛飾区	1月	29日	1464	120	506.9	91.6	5.3	304.7	55.3	8.4	
539	玉ねぎ	北海道	1月	30日	863	120	ND		5.1	ND		5.7	
540	たげのこ	国産	1月	31日	1109	120	ND		4.0	ND		4.5	
541	鶏肉	長野県	2月	1日	1037	60	ND		6.3	ND		7.1	
542	牛肉	長野県	2月	1日	1010	60	ND		6.3	ND		7.2	
543	冷凍むき枝豆	北海道	2月	4日	1005	120	ND		4.7	ND		5.3	

チェルノブイリメモリアルデー 2013

☆第 1 部 2013 年 4 月 28 日 13 : 00 ~ 14 : 30
M ウィング 3 - B 参加費無料 (託児有 : 4/22 までに申込必要)

「甲状腺診療の実際」

遠藤清次医師 (福島県南相馬市絆診療所長)



遠藤医師は震災前は、南相馬市立小高病院の病院長をされていましたが、2012 年の 5 月に南相馬市鹿島区の仮設店舗に絆診療所を開設。鹿島区の仮設住宅の方々を診療しています。

南相馬市では多くの方が甲状腺の超音波検査を終えています。福島県で検査を受けた子どものおよそ 35% がいわゆる A 2 判定 (超音波検査で 5 ミリ以下のしこりや 20 ミリ以下の嚢胞があるもの) という結果は、多くのお母さん達に不安と衝撃を与えました。

遠藤医師は元々、甲状腺診療が御専門です。こうしたお子さん達に、一人ずつ丁寧に診療を続けていらっしゃいます。以前は不安と怒りでいっぱいだったお母さんが、定期的にしっかり健診を受けることで、子ども守って行こうと前向きになっています。

多くのお母さんが不安になっている甲状腺診療について遠藤医師から具体的なお話を聞きましょう。

☆第2部 2013年4月28日 15:00～16:00
Mウイング 6Fホール 参加費無料

「～私の一番の希望たち～」

松本蟻ヶ崎高校演劇部



この台本に取り組み始めて1年が経ちます。1年前を思い出すと、私達は福島のこと、チェルノブイリのこと、まだまだ知りませんでした。しかし、この作品と向き合い、原子力発電所の運転員や消防士、その家族を演じることを通して、チェルノブイリだけでなく日本の問題も見つめることができました。

チェルノブイリの25年には程遠い、たった1年の積み重ねではありますが、作品に反映したいと思います。

蟻ヶ崎高校演劇部部长 丸山恵利奈

【キャスト】

ユーリー・キルシエンバウム…仙波菜野子
ニーナ、ヴィクトリア…宮澤愛香
サーシャ…丸山恵利奈
レオニード、男B…熊谷こえだ
ジャトロフ、男A…中野将綺
アキーモフ…常田唯衣

【スタッフ】

演出…日下部英司・蟻ヶ崎高校演劇部
音響・照明…由井智成 蟻ヶ崎高校演劇部
衣装・メイク・ヘアメイク…宮澤愛香
熊谷こえだ

小道具…丸山恵利奈
舞台美術・大道具…中野将綺・常田唯衣



NO.51

ことばのいのち

宮尾 彰

今からちょうど二年前の三月中旬、あの東日本大震災と福島第一原発事故から一週間弱が経過した頃でした。

すでに、迅速な判断と堅固なチームワークで福島入りを準備されていた神谷事務局長にお電話を入れたのです。

彼女は、京大の小出裕章先生のことばを私に伝えました。

『神谷さん、本当に悲しいことだけれど……』

永遠に途絶えたままのことばに触れて、私たちの間にも、この世の時間が止まったような、いかなる表現をも寄せ付けない乾いた沈黙が続いたのを、今でもはつきりと憶えています。それは、辛うじてドストエフスキーの小説か聖書の中にあるような、厳しいものでした。

今、この沈黙に蓋を^{ふた}して、私たちは生きています。

『あの日以来、はじめて人間のことは聴きました！』
同じ電話で私は、その数日前にラジオで聴いた南相馬市の桜井勝延市長のことばについて、息せき切って語り出したのでした。

その声は、燃料を積んだタンクローリーが原発から三キロ圏内に入ることを拒否したため、市の職員がその場所まで油を受け取りに行っている、という異常事態を明晰な表現で伝えていました。

ほかに逃れる場所もなく、現実に向き合って立つ人間のことばは、隕石のように降って来ました。

事実を記しておく、その後、首都圏に放射性物質が届くには、まだ少しの時間がありそうだ、という言葉説が引き響^つった声で連発されていたのです。

二年が経った今、極度に容量の小さなことばを振り回す人間が増えました。それを知りながらも、その標準で手を打つ人間が増えたのだ、と言うべきでしょうか。

目を重ねるごとに、ことばのいのちが涸れてゆきます。

現実には覆いを被せ、直視すべきものから目を逸らす工夫ばかりが、私たちの生活に根を下ろそうとしています。

それに抗するためには、普通の人間が紡ぐ、かけがえのない小さな物語を掬い取る感性が不可欠です。

牡蠣を養殖する青年と、米を作る青年が、お互いに生業を立て直す現場を訪ねて語り合うのを聴きました。

『海の上で、やっぱり自分は百姓だと痛感した！』
送り出した彼の声に、ことばのいのちがよみがえります。

ラジオから流れるその快活な声を聴きながら四年ぶりの引越し作業をしていたところ、ちょうどこの連載を始めた当時、繰り返し読んでいた資料が出てきました。

一九九二年設立の水俣フォーラムによる企画『水俣展』のパンフレット、水俣病の語り部杉本栄子さんの死亡記事、そして胎児性水俣病患者の通う作業所「ほっとはうす」のリーフレットです。

時あたかも、無農薬で作られた水俣産の本当にすっぱい夏みかんに舌鼓を打っていた矢先のことでした。

のさりともしやい。

あらためて彼女の潜った壮絶な人生に触れた後で、私はこの実に静かなことばに抱き止められました。

「のさり」とは賜の意。「もやい」とは舟と舟とを結ぶ太い綱の意。

なぜ、自らの一生を踏みにじった人災を賜として受容れることが可能なのでしょうか。なぜ、完膚なきまでに寸断された人と人とのつながりを再び一から結び直そうと動くことができるのでしょうか。

私たちは今、沈黙に蓋をしながら生きる道を出で、沈黙の奥底に身を置いて生きる道へと誘われています。

本願は、必ずや伝承されるに違いありません。

私たちに、ことばのいのちを感じる働きのある限り。



松本の食卓

甘酒パウンドケーキ

この冬は各地でインフルエンザが大流行しました。病気にならないためには、自分や家族の免疫力をあげて、ウイルスや放射能に負けない体づくりも大事です。免疫力をあげるにはまず体を冷やさないと、そしてたくさん笑うことも大事だと言われています。

そこでJCFでは2月28日に楽しくおしゃべりしながら甘酒（発酵食品）を使ったおやつ作りをする会を開催しました。その「甘酒パウンドケーキ」のレシピです。

<材料>

小麦粉（薄力粉） 100g・甘酒（濃縮タイプ） 120g・卵 2個・バナナ 1～2本
バター 40g・くるみ（細かく刻む）大さじ2・ベーキングパウダー 小さじ 1.5

<作り方>

1. バナナ（できたら熟して黒ずんだもの）をフォークでつぶす。
2. ベーキングパウダーと小麦粉を合わせて2度ほどふるっておく。
3. くるみを細かく刻む。
4. バターをレンジで溶かす。
5. 卵を入れたボールを湯煎で温めながらクリーム状になるまでしっかり攪拌する。
6. 5に甘酒を入れ、さらに攪拌する。
7. 6にバナナとくるみを加える。
8. 小麦粉&ベーキングパウダーをふるいながら7に加え、粉っぽさがなくなるまで、こねないように、さっくりと混ぜ合わせる。
9. 最後に4の溶かしバターを入れて生地に馴染ませる。
10. 170℃に加熱したオーブンに入れ、40分くらい焼く。

（天板にカップ1杯くらいのお湯を張って湯煎焼きにしても良い）

11. 焼けてきたら串をさし、何もついてこなければ出来上がり。

★卵を白身と黄身に分けて、別々に泡立ると（別立て）かなりふわふわになります。この場合、バナナ・くるみ・甘酒は黄身側に入れて、最後に白身で作ったメレンゲを合わせます。

モスクワ便り



2012年も無事に終わり、あれだけ騒がれていた『世界の終末』も訪れませんでした！でも中には腹を立てた人もいました。多くの人たちが終末に備えて食糧を大量に買い込み、都会のマンションを捨てて田舎に引越したのですから。私の同僚は頻繁にいろいろな缶詰をオフィスに持ち込んで、ご馳走してくれるようになりました。「どうしてそんなに缶詰があるの？」、皆驚きました。「まだまだ沢山あるよ！『世界の終末』の後も、無事だったんだからね！」

新年を迎えてから、新たな宇宙現象に見舞われました——ロシアのウラル山脈に隕石の雨が降ったのです。

2013年2月15日の朝、直径約17メートル・質量約1万トンの小惑星が、秒速約18キロの速さで大気圏に突入しました。その突入の32.5秒後に、チェリャビンスク州の上空15～25キロメートルで爆発したのです。この爆発が隕石の雨と衝撃波を引き起こし、チェリャビンスク州各地の窓ガラスが割れ、1586人が負傷しました。

これほど大規模な宇宙現象は、百年に一度と言われています。チェリャビンスク隕石は、1908年のツングース隕石以降に観測されたもののなかで最大の隕石です。1908年6月30日の午前7時頃、シベリア上空に巨大な火球が飛来して、タイガの非居住地域の上空7～10キロメートルで爆発しました。これがツングース隕石です。その時の爆発波は、西半球を含む全世界の天文台で記録されています。この大爆発によって、2000平方キロメートル以上の範囲の樹木がなぎ倒され、爆心地から何百キロメートルも離れた建物の窓ガラスが割れました。数日間にわたって大西洋から中央シベリアに及ぶ広い範囲で、空の強烈な発光現象や光る雲が観測されました。現在に至るまで、ツングース隕石は謎に包まれています。

しかし今回の隕石落下に関しても、様々な怪しい噂や憶測が飛び交っています。隕石の落下と爆発の瞬間を録画したビデオが、多数存在することが原因です。あるビデオでは、隕石に小さな物体が衝突し、その直後に爆発が起こって、破片が飛び散る様子が見て取れます。米国ではこの件に関して、ロシアの秘密兵器ではないかという報道がされましたが、ロシア政府は隕石のロケット爆撃について公式な声明は出していません。マスコミでは、チェリャビンスク隕石は未確認飛行物体（UFO）によって破壊されたのだという異説まで報道されました。果たして私たちの地球を破滅から救ってくれたのは、異星人だったのでしょうか？

イリーナ・ニコラエワ（モスクワ事務局）

振替用紙のメッセージから



- ◎土地に還れぬものばかりに頼る暮らしからの脱却を！
- ◎少額ですが、原発被災者のために使ってください。
- ◎クリスマス献金として寄付します。
- ◎日本はますます寒くなることでしよう。JCFの活動に希望を託します。
- ◎私が今できることを一生懸命考えながら行動しようと思います。故郷・福島が大好きだから……。
- ◎いつも御苦労様です。どの部所にも寄附したいのですが、皆様の良いと思う様に使ってください。
- ◎とても素敵なクリスマスカードありますが、どうぞございました。何より嬉しいです。わずかな協力でごめんなさい。
- ◎冬が来て春を待ちます。雪と突風の日々を耐えると、生きるための知恵も生まれます。春を夢でえがく想像の日も幸せと思うのです。子どもはなぜ可愛いのか？ 無心だからと思うのです。世界の宝です。時代遅れのおばあちゃんん気持ちです。合掌
- ◎チエルノブイリスタディツアーに参加して以来、連帯基金の活動に感激して8月に会費を送ることにしているのですが、今年の暑さに失念しており、送金が遅れて失礼しました。
- ◎クリスマスカードありがとうございます。
- ◎ナジェエジダとアマルの子どもたちからのクリスマスカードありがとうございます。世界の子どもたちに笑顔でいて欲しい！ ささやかですが。
- ◎JCFに信頼を寄せています。生きていくことに何が大切なのかを教えられます。少しで恐縮ですが、お役にたければと思います。
- ◎幹の太い活動になってきましたね。ますますの実りを期待しています。
- ◎自覚的に行動できる一人一人でありたいと思います。
- ◎今年も福島の子ども達をよろしく願います。

◎リカ先生が3月でイラクに帰ってしまします。あちらでも身体に気を付けて、研究を続けていってほしいです。ご無事を祈っています。

◎昨年も心温まるクリスマスカードありがとうございました。チエルノブイリ・イラク・東北をずっと忘れずにいたいと思います。脱原発実現を!!
◎「グランドゼロ」の宮尾彰さんのエッセイが好きです。

◎毎年クリスマスにご馳走を食べる替わりに家族で1食抜いて、その分をどこかの子どもたちを想って寄付をしています。今回は福島の子どもたちのお役に立ちますように。

◎事実の本、「グランドゼロ」の内容を広めていきたいです。

◎都合により援助が途切れてごめんなさい。これからは少しですが続けられると想います。

◎少ないですが少しでも何かに役立ててほしいです。

◎忘れてはいけない、絶対に。今も苦しみ哀しみ続けている人たちがいることを。

◎様々なことに関心を持ち続け、自分に何ができるかを問いながら行動する人が増えるといいですね。スタッフの皆さんもお身体に気を付けて下さい。
◎宝くじより、社会の役に立ちそうなのでJCFに寄付をお送りします。
◎継続のご努力に敬意を表します。

◎たとえわずかな「ともしび」でも暗闇に於いては確かな「光」だ！ Shine A light！



イラクへ帰国されたリカ医師からのメッセージ

4年前、JICA（国際協力機構）の支援で日本に研修に来たばかりの時は、イラクと比べて生活費の高い日本で、JICAの支援の無い母と二人、私の給料だけで生活していけるのかとても心配でした。

けれども、JCFの理事長であり医師である鎌田先生というすばらしい方が居てくださって、思いもよらないほどよくしていただきました。神谷さんは、アパートをはじめ、家財道具、電話を用意してくれ、私たちを松本に受け入れてくださいました。

その後もJCFは、私たちが日常生活に必要なものをサポートしてくださいました。一つ一つ細かくは書き尽くすことができません。みなさんの親切は、決して忘れません。

またJCFは、研究に必要な資材や薬品も援助してくださいました。

みなさんへの感謝の気持ちを、どう表わせばよいのでしょうか。とても言葉では言い尽くせません。

JCF、JIM-NET、JICA、その他日本のNGOのすべての方々とJIM-NETの佐藤代表の援助に、感謝いたします。これら、NGOを介して他の人を助けようと努力されている日本の方々を、心から讃えたいと思います。みなさんが喜んで人を助けようとする態度に、私は深く感動し、影響を受けました。

そんな親切な方が多い日本においても、私は特に運が良かったのではないのでしょうか。私の学んだ信州大学の小池先生、坂下先生は、実に親切でした。ほかの先生方やスタッフの方々にも、とてもよくして頂きました。皆さんの援助無しでは、私の研究は成功しなかったでしょう。研究、レポート執筆、そのすべての段階において、じっと見守り関わってくださったことに感謝いたします。

また、カトリック教会が私たちのために祈りと寄付を捧げてくださったことにも深く感謝いたします。教会の皆さんは、クリスチャンである私がイラクで暮らすことはとても危険であると聞いて、帰国せず日本で生活できるよう金銭的援助をし、守りたいと言ってくださいました。それを聞いて、私はとても驚きました。

日本のみなさんは、私にたくさんのことを教えてくださいました。そして、私の人生に大きな影響を与えました。

日本は、道徳的に見習うべき国です。そして世界の中で、理想の国です。

私は今後、愛するすべての友人のために、最善を尽くしたいと思います。そして、がんで苦しむイラクの子どもたちのために、懸命に働きたいと思います。皆様の援助を、これからも続けていただけますように信じています。

すべての皆様に感謝いたします。日本と日本の人々に、愛を込めて。

（原文英語 訳・中澤啓子）

Здра в ст вуйт е!



講師の染谷さんが作った甘酒を使った美味しそうなお総菜

楽しく伝統食を作ってみよう!

坪根 智美

2月28日に『楽しく伝統食を作ってみよう!』と題したお料理教室を行いました。今回は料理研究家と言っても過言ではない位お料理が大好きな染谷恵里子さんに、お砂糖の代わりに手作りの甘酒を使ったパウンドケーキを教えて頂きました。当日は小さなお子さんがいるお母さんにも参加して頂ける様に託児を設け、講師の染谷さんはパウンドケーキの他にも甘酒を使ったお惣菜のレシピや、酵素の話や甘酒がなぜ体に良いのか等の話もして頂きました。

このお料理教室の開催に際しては、事務局のある松本周辺に避難してきた方だけではなく、地元の方々にも参加して頂きました。免疫力をあげると言われている発酵食や伝統食を共に作り、学び、楽しみながら交流を深めていきたいという思いも込められています。

私達は食べ物を食べないと生きていけません。でもその食べ物が安全かどうか、わかりにくくなっています。そんな時だからこそ、毎日の食事作りに悩み過ぎて、かえって免疫力を低下させない様にしなければなりません。

このお料理教室で使われた食材には、松本市産のものをベースに、なるべく安心と思われる食材を使用しました。食材への不安を軽減し、少しでもみんな楽しんで時間を過ごして頂けたら良いなと思っております。

福島原発事故から2年が経った今、それぞれの家庭での

こんにちは！



パウンドケーキ作りに挑戦するお母さん達

対策方法や、これは大丈夫だけどこれはダメ、等の線引きが少しづつ定まってきたと思います。今まで周りの景色を見る余裕がない程ただただ頑張つて走り続けてきた方々は、ここで一度少し一休みしてみても良い時期ではないでしょうか。

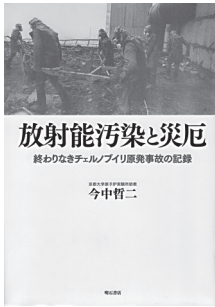
ここ松本にも沢山の方々が避難してきていますが、私も母子で避難してきました。松本に来て少し経った頃、毎日放射能の事を考え過ぎて疲れ果ててしまった事がありました。食べ物や飲み物、空気……、いつの間にか全て放射能に結びつけて考えてしまうクセがつき、何をしても楽しくなく、結局自分の心からのストップがかかり一時期放射能の情報を全て避ける様になりました。しかしそこで一度放射能を考えることから離られた事で、自分の好きな事やりラックスできる時間を過ごす事ができました。また最近になり漸く放射能の情報との適度な距離の保ち方もわかる様になり、逆に落ち着いてもう一度放射能の事を考えてみようと思える様にもなりました。

個人的にはこのお料理教室は、そんな走り疲れた方々の休憩の足がかりになれば良いなとも思っています。

第2回、第3回と毎回良い会になる様に企画を練りますので、どうぞこのお料理教室を楽しみにして下さい！

放射能汚染と災厄

今中哲二



「放射能汚染と災厄
終わらなきチェルノブイリ原発事故の記録」
著者：今中哲二
発行：明石書店
定価：4800 円＋税

Book

原子力研究者である著者は、チェルノブイリ原発事故から4年後の1990年にはじめて当時のソビエト連邦を訪問し、高放射能汚染地域で調査を行った。以来、チェルノブイリを調査・記録することがライフワークとなった。本書はその記録の集大成である。

チェルノブイリ人民法廷

ソランジュ・フェルネクス



「チェルノブイリ人民法廷」
編者：ソランジュ・フェルネクス
訳者：竹内雅文
発行：緑風出版
定価：2800 円＋税

Book

チェルノブイリ事故から10年後、救援活動と被害の実態を調査してきたチェルノブイリ国際医療委員会の提案を受けて、オーストリアのウィーンでチェルノブイリ人民法廷が開催され、国際原子力機関（IAEA）による被害隠蔽・矮小化を告発し、甚大な被害実態を明らかにした。

目で見る チェルノブイリの真実

リチャード・F・モールド



「目で見る チェルノブイリの真実」新装版
著者：リチャード・F・モールド
訳者：小林定喜
発行：西村書店
定価：2800 円＋税

Book

チェルノブイリ事故発生時から、事故処理作業、住民の避難、環境の放射能除染、放射能汚染の食物連鎖への影響、事故炉の埋没処理（石棺）、事故後の調査など、事故後の18ヶ月を多数の写真で綴る「目で見る歴史的記録」の新装版。

プリピャチ

ニコラウス・ゲイハルター



「プリピャチ
放射能警戒区域に住む人びと」
監督・撮影：ニコラウス・ゲイハルター
発売：アップリンク
定価：3990 円（税込）

DVD

チェルノブイリ事故から12年後、原発関連施設の作業員、帰還した住民など、放射能警戒区域「ゾーン」に生きる人びとをモノクロ映像で記録したドキュメンタリー映画がDVD化された。1999年作品・オーストリア映画。2012年日本公開。

ルナパーク

ザ・サウンド・オヴ・ロシア・トゥデイ



「ルナパーク〜ザ・サウンド・
オヴ・ロシア・トゥデイ」
発売：ライス・レコード
定価：2835 円（税込）

CD

現在ロシア国内で人気を博している新世代のバンドや歌手を紹介する編集盤。オルタナティブなアーティストを中心に、ロックをはじめ、ヒップホップ、テクノ、エレクトロニック、フォークまで、様々な才能たちを集めた画期的なアルバム。

フクシマ・ゴジラ・ヒロシマ

クリストフ・フィアット

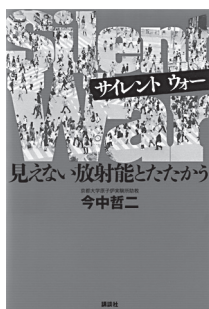


「フクシマ・ゴジラ・ヒロシマ」
著者：クリストフ・フィアット
訳者：平野暁人
発行：明石書店
定価：1600 円＋税

Book

フランス人で作家・演出家の著者は、2011年4月から5月にかけて来日し、福島県いわき市や広島などを訪れた。著者が見た現実と「幻視」をもとに、ドキュメンタリーと創作が相半ばする「紀行文風小説」として生み出された作品。

サイレント ウォー 今中哲二



「サイレント ウォー
見えない放射能とたたかおう」
著者：今中哲二
発行：講談社
定価：1500 円＋税

Book

「フクシマ後」の放射能社会を生き抜くための処方箋。放射能の基礎知識、外部被曝と内部被曝の違いとその対処法、原子力発電のしくみ、原発の運転に伴う「死の灰」などについてわかりやすく解説している。

メルトダウン 田辺文也

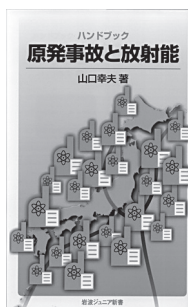


＜叢書 震災と社会＞
「メルトダウン
放射能放出はこうして起こった」
著者：田辺文也
発行：岩波書店
定価：1800 円＋税

Book

福島第一原発事故のメルトダウンはなぜ、どのようにして起きたのか。公開情報の分析と簡単な手計算をもとに事故の真相に迫る。限られた情報からでも市民自らが科学的に分析・推論して、状況を把握し判断することの大切さを説く。

原発事故と放射能 山口幸夫

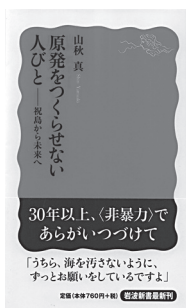


「ハンドブック
原発事故と放射能」
(岩波ジュニア新書)
著者：山口幸夫
発行：岩波書店
定価：820 円＋税

Book

福島第一原発事故はどういうものだったのか。放射能とはどんなものか。被曝とはどういうものか。エネルギーについて知っておきたいこと。「3・11後」に生きるわたしたちが知っておきたい基礎知識をわかりやすく解説する。

原発をつくらせない人びと 山秋 真



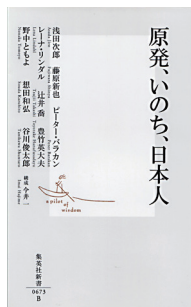
「原発をつくらせない人びと
祝島から未来へ」
(岩波新書)

著者：山秋 真
発行：岩波書店
定価：760 円＋税

中国電力による山口県上関町での原発建設計画に、30年間反対し続けてきた、瀬戸内海に浮かぶ祝島の人びと。海と山を慈しみ、歴史や伝統、文化、祭りを大切に生きる暮らしがある。政府の政策や電力会社に抵抗し続けてきた人びとを描く。

Book

原発、いのち、日本人 今井 一



「原発、いのち、日本人」(集英社新書)
著者：浅田次郎／藤原新也／ピーター・バラカン
レーナ・リンダル／辻井喬／豊竹英大夫
野中ともよ／想田和弘／谷川俊太郎
構成：今井 一
発行：集英社
定価：720 円＋税

ジャーナリストで市民グループへみなどで決めよう「原発」国民投票事務局長の今井氏が、賛同人九名に原発、エネルギー、民主主義、日本社会などについてインタビューした。これからの日本についての思いと方策を語る。

Book

熊取六人組 細見 周



「熊取六人組
反原発を貫く研究者たち」
著者：細見 周
発行：岩波書店
定価：2000 円＋税

大阪府熊取町にある京都大学原子炉実験所で、長年「原子力利用の安全性を問う」立場で研究を続けてきた研究者たち。「熊取六人組」と呼ばれる彼らが、原発に警鐘を鳴らし続けてきた信念と誠実な生き方を追った、ヒューマンドキュメント。

Book

Information

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）活動紹介

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は1991年1月に設立されました。1986年4月26日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故の放射能被災地へ、主に医療を中心として支援活動を展開しています。

支援開始当初のベラルーシは、深刻な経済状況で、白血病など病気の子ども達は、十分に治療を受けることができませんでした。衛生管理もできなかったために、多くの子ども達は感染症などで亡くなっていました。JCFは、現地の医師らと話し合いながらプロジェクトを組み、信州大学などの医療従事者と共に着実な支援活動を続けてきました。

そして2004年、活動の支援先はイラクへも広がりました。イラクでは湾岸戦争以後に白血病が急増しています。長期にわたった経済制裁後、新たに起きた戦争で極端に物資が不足、子ども達の治療もままならず、多くのいのちが失われています。



2011年3月11日の東日本大震災、そして福島第一原発の事故により、東北地方のみならず広大な範囲で放射線災禍を受けました。JCFは事故直後から緊急医療支援、外部被曝線量測定、子ども達の診察プロジェクトを行ってきました。今後も子どもの検診や環境線量測定、食品汚染測定など、子ども達を被曝から守るための活動を続けます。

◆ JCF 会費振込口座

正会員年会費（1口）	10,000円
賛助会員年会費（1口）	3,000円
郵便振替口座番号	00560-5-43020
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

◆ JCF / イラク支援振込口座

血液成分分析機購入、医師招聘研修、薬品購入

郵便振替口座番号	00520-0-81078
加入者名	JCF / イラク支援



第 95 号

発行日 2013年4月26日

発行人 鎌田 實

発行所

日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字 貝原 浩

イラスト 榎野ひかり

スタッフ 神谷さだ子

布山みな子

横内香苗

中澤啓子

坪根智美

協力 寺島仁美

J I M-N E T

風樹 光

印刷 電算印刷

■編集後記

ドイツでは、メルケル首相の委託で設置された「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」による答申に基づき、脱原発の方針が決定された。そのドイツ・マインツからの寄稿「マインツ便り」が始まった。マインツ友の会の柳田さんのご両親は、水俣や反原発運動に関わっていらした。事務局の書棚にもお父さんの著書がある。昨年、柳田さんが事務局を訪ねて下さったことで、急にドイツが近く感じられるようになった。連載が楽しみ！ (布山)

販売物紹介

Book

・「チェルノブイリからの伝言」

J C F 編 (オフィスエム) 1200 円

CD

・「小室等／ベラルーシの少女」

(8cm シングル盤) 1000 円

◆がんばらないレーベルCD

・「ふくしま・うた語り」

1500 円

・「ヴラダン・コチ／ふるさと」

2500 円

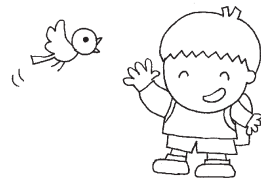
・「坂田明／ひまわり」

2500 円

ドクターかまちゃんの寒天ゼリー

1000 円

* 販売物の詳細は事務局にお問い合わせ下さい。



●特定非営利活動法人

日本チェルノブイリ連帯基金 (J C F)

〒 390-0303

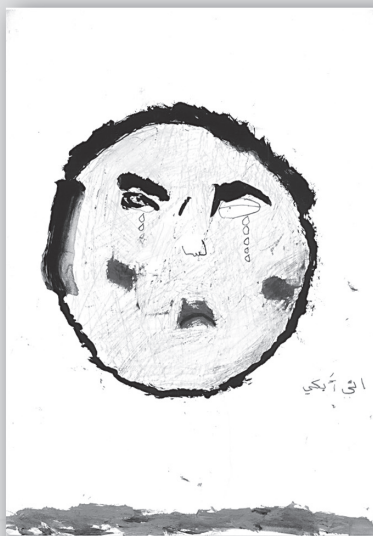
長野県松本市浅間温泉 2-12-12

TEL 0263-46-4218 FAX 0263-46-6229

E-mail asama@jcf.ne.jp

Website http://jcf.ne.jp





ぼく泣くぞ

ムハンマッド君 (9歳) 2003年当時

2003年、3月20日、アメリカのイラク攻撃が始まりました。

「畏怖と衝撃」と名付けられた作戦。

バグダッドにミサイルのあらしをふらせ、

イラク人を恐怖で萎縮させようという作戦。

爆撃がおさまった時、

ムハンマッド君が怒りを込めて描いた絵です。